

## いつだつて『人間』であるために

弘前大学教育学部附属中学校

小島にこ

最後、その虎が白い月へ吠えたとき、私の目からは涙が出てきた。なぜ涙があふれたかはわからなかつたが、この話が、私に大きな事を訴えかけているのを感じた。

一つ、この話の中で、私の胸に爪跡を残した言葉がある。

「臆病な自尊心」というものだ。

「もちろん、かつて郷党的鬼才といわれた自分に、自尊心がなかつたとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであつた。」李徵はそう語つている。臆病、という弱さから、自尊、という強さが生まれるのだろうか。初めはわからなかつた。しかし、二度目に読むうちにやつとわかつってきた。昔から才能があるともてはやされていた李徵は、詩で名を為そうとした。しかし、師についたり、いわゆるライバルと切磋琢磨しあつたりなど、自分を高めるような行動には出なかつた。恥ずかしいからだ。自分を高めるには、自分の短所を直さなければいけない。つまり、自分の非をさらけ出し、認めなければいけないのだ。若くから俊才といわ

れてきた李徵にとつて、それは何よりの屈辱であつただろう。李徵は、その「尊大な羞恥心」で、自分を高める道を閉ざした。

羞恥心が侵食した、穴ぼこだらけの実力。この穴を埋めた

のが、「臆病な自尊心」だ。自分の才能の底なんて見たくない。底なんてない。そんな臆病な気持ちから肥大した空虚な才能は、本当に持つていたものさえも潰していつただろう。「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」この二つの感情、この二つの猛獸に、李徵は飲みこまれてしまつた。虎は、その模様が文字の羅列に見えることから、「文字の獸」といわれているそうだ。言葉や文字を操る詩人を目指した彼は、逆に文字に纏まれた獸になつてしまつた。彼の文字への執着が転じた結果、文字に捕らえられてしまつたのだ。部分的に李徵の夢が叶つてしまつているのが恐ろしいところだ。素直に努力をすればよかつたのだ。穴のない才能を、生まれながらに、努力もなしに持つている人なんていないのに、

と私は思った。しかし、妙に背筋が伸びるような感覚がした。

私だってそうなのだ。

も人間だけだ。李徵が袁慘と出会いて人間を取り戻したのは  
きっとそういうことなのだろう。

そのメッセージが、私の心に伝わってきた。

題名を聞いたことがあるし、面白いらしい。そんな軽い気持ちでこの作品を選んだが、これから私のに、とても大切なことを教えてくれた。

中学三年生。進路について本格的に考えだした今、そのもつと先を見すえながら目の前のことをこなさなければいけない。すると、今の自分と夢や理想との差を突きつけられることがあるし、きっとこれからもそのようなことがずっと続いていくのだろう。正直わたしは今、周りの人たちや理想との差に<sup>あわ</sup>慌てて戸惑つてる最中だ。それでも、自分の非を受け止め、噛みくだいて、前を向いて、逃げずに進んでいくべきなのだ。認めたくない、見たくない、進みたくない、頑張れない。そんな心の猛獣たちをつなぎとめるものを、いつでも持つていようと思った。それが私が、人間でいる意味だ。

獣は、自分の感情一つで動いてしまう。その感情、つまり猛獣の心を、おさえられるのは人間だけだ。感情を噛みくだいて、次に目を向けられるのは人間の証。そして、辛い胸の内を言葉にして打ち明けられる、「友」という存在を持つの